

IDENTITY

ITK という2年生部員がいるとしよう。ここで岩東テニス部という集団は、MZKM も EBE も GMB も SKHR も TCHBN も KTGK も TSTSM も、そして ITK もいるから岩東テニス部なのであって、ITK の代わりに、KNK とか NTT という ITK よりテニスが上手な人がいたとしても、もうそれは岩東テニス部ではなくなってしまう。だとすれば、岩東テニス部において、ITK には、その人が ITK でなくてはならない確かな意味があるはずなのだ。しかし「ITK が ITK でなければならないことの意味」が何であるかを、ITK がちゃんと理解しているかという、なかなかそうもいかない。最近 MDKR という部員が加わってブイブイ言わせているけれど、彼だって「MDKR が MDKR でなければならないことの意味」を聞かれて、答えられるかどうかは心こころもと許ないのだ。しかし、「それが確かにある」ということは感じているし、感じているからこそ部活が楽しい。充実感も生まれるのだ。

これは岩東テニス部の中に限ったことではなく、生活を取り巻くすべての環境で、人間（特に若者）は「自分が自分でなければならないことの意味」を探しながら生きていって、言っても過言ではない。見つからないまでも、「それが確かにある」ということを確認しながら生活している。それが確認できる時、人は満ち足りた思いの中で、安心して生活することができるけれど、確認できない時、人は不安に襲われ、時には絶望する。恋愛を例にとって考えれば、このことは容易に理解できると思う。

エリクソンという学者が唱えた アイデンティティ identity という言葉の語源である identify は「確認する」という意味の動詞である。そして、アイデンティティ identity とは、「自分が自分でなければならないことの意味」を確認することに他ならない。

「自分は何者なのか？」……この問いに答えようとする孤独な努力こそ、若者が アイデンティティ identity を獲得して（「自分が自分でなければならないことの意味」を確認して）、一人の大人として成長するためには避けて通ることができない大切なプロセスなのだ。

仲がいいのは良いことである。しかし、「仲がいい」その友人は、もしかしたらお前と“そっくりな人”なのではないだろうか。自分と“そっくりな人”の中に身を置くことは、安心して心地よいことかも知れないけれど、それでは「自分は何者なのか？」という自問には答えられない。いつまで経っても、本当の意味での アイデンティティ identity は獲得できないのだ。もしも“そっくりな人”に囲まれた安心して心地よい環境に、“全く異なる人”が入ってきたらどうだろう。アイデンティティ identity を獲得できていない人（「自分が自分でなければならないことの意味」を正しく理解していない人）は、その安心して心地よい環境を守るために、“全く異なる人”を排除しようとさえするけれど、それが所謂 いわゆる “いじめ”である。「自分は何者なのか？」この問いかけに本気で答えようと努力するなら、人はむしろ自分とは“全く異なる人”と知り合い、時には“全く異なる人”の中に身を置き、それによって“全く異なる人”を理解し、その人との違いを通して、自分を正しく見つめる必要があるのだ。